



九州産業大学 国際交流センター報

JUNCTION

CONTENTS

留学生会から新入生のみなさんへ	2
留学生の四季	3
派遣留学体験記	4
九州産業大学派遣留学案内	6
ホームビジット	7
国際交流ふれあいフェスタ 2007	8
九州産業大学で学んで	10
平成 19 年度国際交流の歩み	12





写真中央が金 蝾旭留学生会会長。

留学生会から 新入生のみなさんへ

平成19年度 九州産業大学留学生会会長

キム ドン ウク

金 蝾旭（韓国）

九州産業大学に入学したみなさんにお祝いを申し上げます。私は平成19年度九州産業大学留学生会会長の金 蝾旭です。

我々留学生会は、故郷を離れた留学生同士が励ましあい、それぞれの留学の目的を忘れずに充実した留学生活を送ることを目的にしています。また、日本人学生や地域社会との交流にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

留学生にとって最も大事なことは、自分の目的や夢を忘れずに、悔いのない生活を送ることです。そのためには、何事にも積極的に取り組んでいくことが大切です。そして自分の悩みを相談できる友人を作ることです。消極的な気持ちのまま一人で悩んでいては、充実した留学生活を送ることができません。留学生会が実施する行事等を利用して、友人づくりのきっかけにしてください。

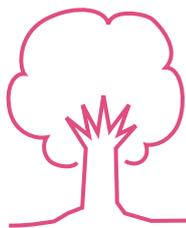
また、わからないことは授業の先生や職員の皆さんにも積極的に相談しましょう。そして、授業等で知り合った日本人学生とも恥ずかしがらずに積極的に交流してください。ゼミナール等で日本人学生と一緒に活動するのもひとつの方法です。

そして日本人学生のみなさん、文化や習慣の違いでお互いに戸惑うことがあると思いますが、我々は、皆さんと少しでも深く理解しあい、国籍、人種、文化を超えた友情を育むことを強く願っています。我々留学生会もがんばりますので、みんなで協力して、九州産業大学での生活をより明るく楽しいものにしていきましょう。

最後に、皆さんのこれからの大学生活が笑顔で満ちあふれたものになることを祈念いたします。

新入留学生歓迎バスハイクでスペースワールドに行きました。
みんなの笑顔がとても素敵です。





留学生の四季



本学では、12カ国 468人(平成19年5月現在)の留学生が、遠く故郷を離れ、それぞれの目標に向かって勉学に励んでいます。また、本学では留学生会が組織されており、留学生同士や日本人学生との親睦行事、交流活動を通して国境を越えた連帯感や友情が育まれています。



新入留学生オリエンテーション
平成19年4月7日(土)



香椎祭で模擬店を出店
平成19年11月2日(金)～4日(日)



留学生会定例総会
平成19年4月17日(火)



バングラデシュのサイクロン被害に対する
義援金募金活動
平成19年12月10日(月)～21日(金)



新入留学生歓迎バスハイク
(スペースワールド・いのちのたび博物館)
平成19年5月20日(日)



留学生ホームビジット
平成19年12月～平成20年1月

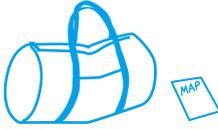


留学生と日本人学生との懇親会
(海の中道海浜公園デイ・キャンプ場)
平成19年10月20日(土)



外国人留学生送別会
平成20年3月21日(金)

派遣留学体験記



本学の派遣留学では、留学生活を通してグローバルな視野と感性、知識を育成することを目的として、5ヵ国8大学の交流協定校に学生を派遣しています。また、芸術学部の学生を対象として、ドイツ及びフランスの大学等教育機関に学生を派遣しています。

「自由」の正体とは…

佐瀬 智美さん

芸術学部 デザイン学科

派遣先：ボルドー美術学校（フランス）

派遣期間：平成19年10月～12月



パリでの佐瀬さん

ボルドー美術学校での学生生活やフランスでの日常生活で最も感じたのは「自由」でした。私がこれまで認識していた「自由」とは、自分が好きにしている時間の事だと思っていました。勿論それは間違っていました。では私はその自由な時間に何をすべきか？という事がこちらでの課題でした。

学校でも実技はかなり自由で、したいことができます。そしてそのサポートとしての教授がいるという形なので、作りたいものを具体的に説明する。素材はこうしようと思っているのだけど、これでいけるだろうか？などと質問すると、教授は教授であるまに一人のアーティストなので、自分の作品ではこうした、それについてはあの先生が専門だ等の説明を聞き、試行錯誤を繰り返して作っていきます。最も原始的で根源的な学習方法だと感じました。小学生から今まで私達は、教育とは教えられるという事のように感じていましたが、ここでは全てが逆さまでした。私達はデッサンを教えられる事はありません。そこではこのようにアタリをつけて形を取り、このように質感を表現する等とコツを教えられる事はありません。自分で見つけ出さなければならないのですから、3年、4年となっても基礎的な力が乏しい作品は一目で分かることもあります。とても厳しい世界だと感じました。しかしその事は、制作への渴望をかきたて、私は制作にすぐに没頭し始めました。

授業は時折、校外で行われそこで私の芸術に対する今までの概念を打ち砕かれました。ルーブルのカルーゼル広場の片隅で巨大な現代美術の展示即売会、そして現代写真の展示即売会でのことです。そこでは当たり前前に芸術に一般的な市場があるのだと言う事でした。一言で言えば、芸術は一種の自己表現であり、自己実現であります。自己表現がビジネスとして成り立つために充分大きなマーケットがあるとは思ってもみませんでした。勿論、パリは世界中で一番の芸術都市だと思います。その最高峰であるルーブル美術館の一部を

使って展示即売するのですから、展示するアーティストはすべて著名な人物ばかりです。ですが、その作品のキャプションの隣に値札が付けられ、来訪者には図録とともにプライスリストが配られ、また買われていくのです。こんなことが身近に行われることだとは考えてもみませんでした。ましてや現代美術です。現代美術のアーティストの作品の中には、これは芸術とは思わない、という作品もあります。現代美術の何が美しいかは人それぞれ異なっていていいのだと気付きました。世界最大の現代美術展示即売会は、まるでアーティストと買い手のお見合いパーティのようでした。運命的に彼らは出会います。買い手の、つまり他人の自己でさえも、アーティストは代弁し得るだけのパワーを作品に秘めているのです。

この衝撃は、これまでの私がアマチュアであるという一線を無意識にひいていたのだと私自身に思い知らせると共に、私の中にあるプロとしての意識と、良い作品を見た事による制作への情熱を燃え上がらせました。芸術の中で生涯を過ごす人とする学生は、良い作品を見て打ちのめされ、そして成長するのです。彼らと自分たちは既に同じ土俵で対峙しているのだと気付かされるのです。

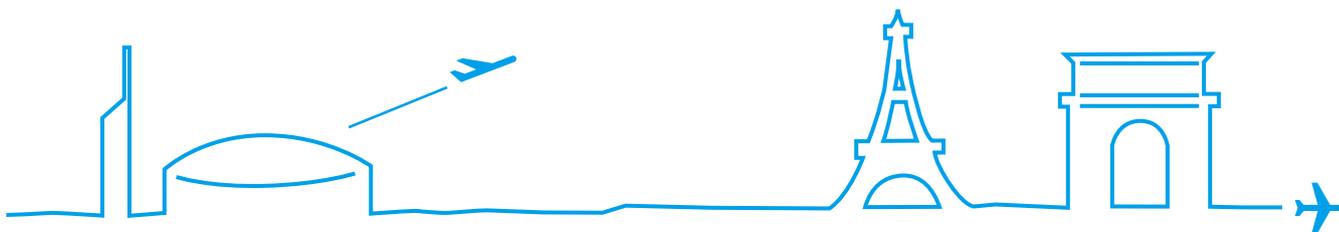
学校では誰も基礎が大事などとは教えてくれません。作品にパワーを与えるのは間違いなく基礎ですが、それには自分で気付かなければならないのです。

この自由な3ヵ月間はとても楽しく過ごせましたが、同じ程に過酷でした。ちっぽけな自分が一流だと思っていたアーティストと同じ場所に居るという事実から逃げていたのです。アーティストになるのは卒業してから、なんて悠長に考えていたのだと思います。一体私は何から卒業して、何になるつもりだったのでしょうか。

フランスは自由があるからこそ成り立っていて、そしてそれは人が人として生きる為に必要な事だと気付きました。自由の正体を暴いた事がこの留学生活において私の一番の収穫だと言えるでしょう。



現代美術展にて



「言葉の壁から脱却!!」

吉村 政和さん

経営学部 国際経営学科
(平成19年度卒業)

派遣先：中国人民大学 (中国)

派遣期間：平成19年8月
～平成20年1月



言語生仲間とともに
(後列左端が本人)

九州産業大学から派遣留学で来る学生はみな、言語生と呼ばれる中国語だけを学ぶ漢語班に所属します。

私は8月の夏季短期講座から留学していた事とクラス分けのテストがさほど悪くなかったことにより、明らかに自分の中国語レベルより上の中級2クラスに分けられてしまいました。そのため、授業が始まってすぐのクラス変更期間に、何度も下のクラスに変更してもらおうと思いましたが、留学させてもらったからには、ぬるま湯に浸かりせつかくの素晴らしい学習環境を無駄にしてはならないと思い、このクラスに残って頑張ろうと決めました。

授業について行くために、予習・復習は欠かせませんでした。私はリスニング力と会話を鍛えるために、中国人の学生と相互学習を行うのはもちろんのこと、中国人民大学の近くにある北京理工大学で週1回開催される日本人学生と中国人学生の相互勉強会にも参加しました。相互学習とは読んで字のごとく、お互いに学び合い、教え合うことです。この勉強会は、基本的に日本人学生は中国語、中国人学生は日本語を話します。この学習方法はとても良いものですが、唯一の欠点として相手も日本語が分かるので、その相手の言語力に頼ってしまい、つい日本語ばかりで話してしまうという点です。

私は日本語に一切頼らない、中国語のみでコミュニケーションを取る環境づくりとして、北京語言大学の留学生サッカーチームに所属し、試合中はもちろん、作戦会議、反省会も全て中国語という環境に身を置いて、リスニング力と会話力の向上に努めました。

この留学で私の中国の発音・リスニング力が留学前に思っていたより向上したかと言えば決してそうではありません。しかし、ネイティブに程遠い私の発音でも相手に伝わるのが分かりました。また、リスニング力もテープから流れる内容では発揮できませんが、相手が話すときの表情・動作・勢い

また最も強く言っていることさえ注意すれば、相手の言っている事が理解出来るということが発見できました。私はこの留学で生きていく力を学びました。留学前より中国語が相手に通じ、理解されること、また相手の言っていることが理解出来るという自信がつかしました。これは、言葉が通じない中でまた相手の言っている事が分からない中で、冷や汗を掻きながら、なんとか自分の言いたいことを言い、なんとか相手の言っていることを理解しようと多くの人と交流していく中で培われて行きました。

私はこの留学を通して、語学力がそんなになくても、言葉の壁は積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢と相手を思いやる気持ちを常に忘れなければ、なんなく越えられるのだと思いました。

また、私が見た・体験した中国の印象は、日本より治安は悪いけれど、その分自覚して気をつけて行動すれば、日本と同じように安全に暮らしていけるということです。食の問題について言えば、様々な問題があるようですが、中国に限ったことではないと思います。だからと言って問題ないとは思いませんが、自分の判断で不衛生な商品は買わないようにするとか、同じ商品なのに明らかに他店より安いモノは買わないなど、日本にいる時より警戒心を持って行動すればいいだけの話だと思いました。

大気汚染については、留学前には想像出来ないほど悪かったです。誤解しないで欲しいのは、北京全域が大気汚染されているわけではありません。

中国人民大学について言えば、提携している日本の大学は有名で素晴らしい大学ばかりです。また、中国人民大学は中国で5本の指に入る名門校であり、それに見合った学習環境・先生並びに学生の質があります。

以前、きっと学内も人があふれて窮屈だろうというイメージがありました。大学構内は、芝生の広場や小さな池など自然環境にも配慮があり、中国に対して抱いていたイメージが間違いであったと分りました。

九州産業大学派遣留学案内

平成 21 年度派遣留学生を下記の要領で募集します。募集開始は 2008 年 12 月の予定です。派遣留学先大学の授業料減免、派遣留学奨学金など詳細については、国際交流センターへお問い合わせください。

<h3>交換留学</h3> <p>対象学部：国際文化学部、経済学部、商学部第一部・第二部、経営学部 留学期間：2009年8月～2010年1月 募集開始予定：2008年12月～</p>		<h3>芸術学部留学</h3> <p>募集開始予定：2008年12月～</p>
<h4>アメリカ</h4> <ul style="list-style-type: none"> ●アビリン・クリスチャン大学 選考試験：書類審査 TOEFL ITP 面接（英語・日本語） 	<h4>中国</h4> <ul style="list-style-type: none"> ●中国人民大学 選考試験：書類審査 語学能力試験（中国語） 面接（中国語・日本語） 	<h4>ドイツ</h4> <ul style="list-style-type: none"> ●シュトゥットガルト造形美術大学 留学期間：2009年10月より4ヵ月 選考試験：書類審査 語学能力試験 面接
<h4>イギリス</h4> <ul style="list-style-type: none"> ●リバプール・ジョン・モーズ大学 ●リーズ・メトロポリタン大学 選考試験：書類審査 TOFLE ITP 面接（英語・日本語） 	<h4>韓国</h4> <ul style="list-style-type: none"> ●東亜大学校 ●東国大学校 選考試験：書類審査 語学能力試験（韓国語） 面接（韓国語・日本語） 	<h4>フランス</h4> <ul style="list-style-type: none"> ●ボルドー美術学校 留学期間：2009年10月より3ヵ月 選考試験：書類審査 語学能力試験 面接
<h4>フランス</h4> <ul style="list-style-type: none"> ●リール・カトリック大学 選考試験：書類審査 語学能力試験（フランス語） 面接（フランス語・日本語） 		

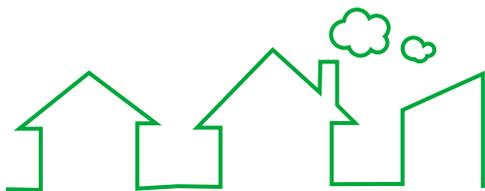
留学への羅針盤

「留学って興味あるけど、何を準備すればいいの??」
そんな皆さんのために国際交流センターから留学までのステップを紹介します！



※上記の内容・日程等については、現時点での予定を表記しています。詳細は派遣留学募集説明会等にて説明します。

ホームビジット



留学生は日本に来て主な観光地を訪れたり、日本の文化に触れる機会はあるようですが、日本人のありのままの生活に触れる機会は少ないようです。実際、日本人の生活に触れることは留学生にとってはもちろん、受け入れた家族の側にも貴重な体験となり、たいへん好評です。

さて、今回はどんなホームビジットになったのでしょうか。



「ホームビジットを終えて」

工学部 物質生命化学科
教授 米光 直志

新年を迎えたばかりの1月中旬、「昼食・お茶&おしゃべりの会」と称して、我が家に留学生を迎えました。留学生は、国際交流センター主催留学生行事の一環であるホームビジットへの参加希望者であった芸術学部ゴシヨリの吳書璣さんオウシヨウロン（マレーシア出身）と経営学部の王正坤さん（中国出身）の2人。

当日は、冷たい風がありましたが、青い空に白い雲もあつたので、近くの三苦海岸まで散歩することにしました。途中、福岡市有形文化財に指定された、綿津見神社仏像群が奉られている綿津見神社に立ち寄ったところ、偶然にも、一年間の無病息災を祈願するどんど焼きの最中で、冬の伝統行事に触れることができました。岩と砂浜の三苦海岸では、休日を楽しむ家族や若者の姿が見られました。ゴミがない足下の海岸線に感心し、博多湾を行き来する大小の船を眺めながら、眼下に広がる海の景色「日本・福岡の一面」を楽しみました。

日本語を話すことに不自由することのない吳さんは、日本文化を堪能しながら、専攻分野である映像・デザインの創作で腕を磨いているようでした。王さんは、現代日本の生活風習には、まだ何かと戸惑いも多いようですが、九産大にすっかり溶け込んで、学生生活を楽しんでいるようでした。

また、お二人は、日本の実情に触れ、世間では事件・事故も多く、若者の活気も乏しいことや若者の国際交流への関心の薄さに驚いているところもある様子でした。お二人との会話を通じて、本学の語学教育と留学生への処遇に一考を要する点があると感じました。

私としては、共通のテーマを把握しておけばもっと良かったかな、と反省しています。日本の産業・文化・自然について直接的に触れる機会をもっと増やすことが大切なのではないかと感じました。

お二人の、福岡・九産大での留学生活がますます実りあるものであって欲しいと祈ります。



左：吳書璣さん 右：王正坤さん



三苦海岸にて

国際交流ふれあいフェスタ2007



九州産業大学では留学生と日本の学生との相互理解を深める取り組みの一環として、国際交流ふれあいフェスタを開催しています。昨年度は「異文化を知るとはということなのか？」について「日本のアニメ」と「文化人類学」の観点から二つの講演を行いました。

グローバル化する社会に向けて

演題：「ジャパニメーションの現在 / 動漫 / 企画」

芸術学部 デザイン学科
准教授 黒岩 俊哉



戦前からのアニメライブラリー。
会場は一種の興奮に包まれた。

「ドラゴンボール」「エヴァンゲリオン」「クレヨンしんちゃん」「セーラームーン」。日本の若い学生にとっては、よく慣れ親しんだタイトルが次々と出てくる。これらは3年ほど前、九州大学のJapan in Today's World (JTW) という授業の中で、各国から集まった外国人留学生から出されたものだ。私の担当科目は「Introduction to Japanese Film(日本映画入門)」で、日本映画を通じて、日本の映像を解説するというものだった。その初日のアンケートで「もっともあなたに影響を与えた映画 / 映像はなにか」という答えに、上記のような「アニメ」が過半数を占めていたのだ。しかし、私自身、この結果にあまり驚きはしなかった。日本の文化輸出産業の中で「マンガ」「ゲーム」とともに「アニメ」は最も上位に位置し、各国に浸透していることを知っていたからである。

授業の中で挙げたいいくつかのアニメ番組、それが最新のものでも、彼らはすでに知っていて、むしろ私が知らないタイトルや情報が次から次へと会話の中から出てくる。そしてもっと印象的だったのが、彼らがアニメを語る時、目や顔の表情が一瞬にして和らぐことだった。日本人の教師である私と、外国人の学生である彼らとの距離が一気に近くなるのを感じた。

彼らはアニメを生(なま)の声で語り、日本の学生以上に真剣に感情を表現していた。我々にはない髪や目を持った学生たちが、ときに片言で、ときに流暢に日本のアニメを語る姿に、私自身がとまどいを感じることもしばしばであった。なぜなら彼らはその時、十分に「日本的」であり、まぎれもない「日本人」であったからだ。

今回の講演は前述のJTW以来であり、代表的なアニメー

ション作品の上映をしながら解説を行った。上映作品の中には現在視聴困難なアニメ作品もあり、私のつたない理論展開よりも、むしろそちらの方が盛り上がっていたかもしれない。とはいえ時間内ではとても語り尽くすことは難しく、今でもつくづく残念に思っている。

その後「産大アニメ夜話」というパネルディスカッションを行った。参加してもらったマレーシア、中国、韓国、ブラジルそして日本の学生の熱い語り口は、3年前の留学生とまったく変わらない姿であった。ただひとつ違った点は、そこにでてるアニメのタイトル数が格段に増えたということだ。中には現在放映中のアニメを自国語で自ら吹き替えている、という強者もいた。彼らは「アニメを見るのは日本語を学ぶため」と語っていたが、実は「アニメを見るために日本語を学ぶ」のではないかと、私は思う。

イベントの後、隣の教室で行われた茶話会では、留学生・日本人を問わず、誰とも無く、好みのアニメのキャラクターを黒板に描きはじめていた。

今回の講演会を通じて確信したことは「アニメ」は日本独自の文化だと思っはならない、ということだ。それは全世界的な現象であり、同時代の共通のコミュニケーション・テーマとして成立している。戦後をみれば、日本の文化産業の輸出のなかでは最大のものであり、そして重要なのは、それらが確実に世界の人々に影響を与えているという事実だ。「アニメ」が日本と世界、そして世界と世界をつなぐリンケージとなる日は、もう来ているのだ。



「DAICON FILM」は80年代はじめ、当時の大学生を中心に自主制作された作品である。商業主義の末端であるアマチュア・ファンが、プロを凌駕する作品を制作したことは「アニメ」自体が一般的な商品流通から脱却しはじめるきっかけとなった。



異国の人との出会い

演題：「異民族へのまなざしと未開のイメージ」

国際文化学部 地域文化学科
教授 森谷 裕美子

私の専門は文化人類学で、国際交流ふれあいフェスタになぜ文化人類学者である私が「異民族」や「未開」の話をするのかと疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれないが、私は、この文化人類学という学問が国際交流に果たす役割は極めて大きいと確信している。

どうしても文化人類学というと、とうの昔に死んだ人間の骨を掘りだして研究する「骨の学問（考古学?）」と間違われたり、「未開社会」と考えられている社会へ出かけて、そこでの珍しい風習や習慣を研究する物好きな学問と思われたりするが、実は文化人類学は「未開」「文明」を問わず地球上のあらゆる（生きている!）人間社会とその文化を研究対象とする学問であって、わざわざたいへんな思いをして遠くへ行かなくても、それによって学ぶべきことは私たちの身近なところにもたくさん転がっている。

たとえば、グローバリゼーションの進展は、私たちにさまざまな情報を瞬時にもたらしてくれ、世界中の「未開社会」に関する情報も簡単に手に入れることができるようになったが、実は、そうした情報が、必ずしも真実を伝えているとは限らないというだけでなく、これらの情報の多くに差別や偏見に基づく誤ったイメージが投影されているということに私たちは気づいていない。そうしたことを気づかせてくれるのも文化人類学である。近年テレビでも異文化を扱った番組や異文化体験を中心とする番組がたくさん見られるようになったが、とりわけ、このようなマスメディアが描く異文化には差別や偏見に満ちた「未開人のイメージ」が捏造されており、そこに、しばしば文化的なハラスメントが起きている。

こうしたハラスメントが起きるのは、私たちが自分たちと異なる文化、しかも「未開」というイメージでとらえられた文化と対峙したときである。それでは、「未開」とはいったいなんだろう。一般的な意味での未開とは「文明がまだ開けていない」ということで、そうした未開の文化をもつ社会とは「文明社会との対比において、国家や文字をもたない、技術水準が低いなどの特徴をもった社会」だそうだが、要するに「非西欧的で」「自分たちと異なる」社会であることがわ

かる。自分たちの文化の価値観を絶対視し、「異文化のほうがおかしい、野蛮だ、遅れている」とみなすような考え方を自民族中心主義というが、こういった考え方がとりわけマスメディアの描く異文化のあちこちにみられる。しかも、創る人も見る人もそれをまったく自覚していないことが多い。文化的なハラスメントを受けたことのない人々にとって、そんなことは大した問題ではないかもしれない。しかし当事者たちにとっては、それは大きな精神的苦痛であるに違いない。また、こうした自民族中心主義的な考え方が民族や国家のレベルで高まれば、民族紛争や戦争といった国際的な問題に発展する可能性もある。

文化人類学的な考え方の基礎をなす文化相対主義は「文化に優劣など存在せず、相対的な違いがあるだけだ」というが、実際にはマスメディアなどによって長年刷り込まれてきたイメージを皆がすぐに払拭することは困難であるに違いない。だとすれば、まず私たちにできることは、そうした自分たちの「異文化へのまなざし」に敏感になるとともに、異文化との出会いを積極的に楽しむことではないだろうか。私自身、講演のあとの留学生とのシンポジウムや交流会はとても刺激的で楽しかった。国際化の時代を上手に生きるためにも、今後も多くの日本人学生がこうした機会を積極的に活用してくれることを期待したい。



留学生のみなさんと

九州産業大学で学んで



九州産業大学は5カ国8大学との間で交換留学協定を結んでいます。今回、九州産業大学にやってきた二人の交換留学生に九州産業大学での学生生活についてお話を伺いました。

「日本の染織文化に触れて」

ベレニス カマー

(ドイツ・シュトゥットガルト造形美術大学)

受入れ期間：平成19年10月～平成20年1月

受入れ学部：芸術学部

「こんにちは。私は、ベレニス カマーです。」

私が、来日当初日本語で言えた挨拶は、これぐらいだったと思います。日本はいったいどんな国なのか、日本だけでなく他のアジア圏も行ったことのない私には、まったく見当が付きませんでした。来日して1週間、私はまるで未知の世界に送り込まれて駆け回る、ゲームの主人公のような気分になりました。スーパーで買い物するときに読めない文字が表示された商品を買うこと、コンビニで見かけた茶色い物体を見つけ、「これは何？」と自問自答すると、それは、「こんにやく」だったり、お風呂の浴槽はいったいどう使うのだろうか？など、毎日、新たに発見することばかりでした。

私は、専攻分野である染織デザインを学ぶと同時に、日本の染織とその技法について学びたいと思い、交換留学制度を利用して来日しました。

ikatとして知られる緋のように、伝統的な染織について聞いたことがありましたが、「久留米緋」という緋があることを、初めて知りました。留学中に、一番印象に残っていることは、授業の一環で久留米緋の工場見学に行ったことです。ドイツの工芸品はあまり高い評価を受けていませんし、ほとんどの芸術家は、工芸職人としてみられていませんが、日本の伝統工芸文化に触れ、職人の技を見てとても感動しました。

私は、緋と型染めに集中して制作作業に取り組みました。緋の制作経験はあったので、織り機の使い方に戸惑うことなく、順調に進みました。シュトゥットガルト造形美術大学には、九州産業大学の染色工房のような立派な工房はなく、ここでの作業はとても楽しかったです。糸から染色することで、個性を生かした作品に仕上がります。いろいろなアイデアが浮かぶので、創造力が増し、整理をする時間がないくらいです。緋の技法を用いて、今後も制作活動が続けるつもりですので、もしかすると卒業制作のテーマになるかもしれません。自分用の着物を糸から染色し、織り上げるまでの一連の作業をしたいと思っています。型染めを学んでみると、用いられる特殊な紙、米からできた練り粉は、ドイツでは入手困難であることがわかりました。来日前は、新しいデザインを取り入れながら、伝統的な技法で制作を行いたいと考えていまし

たが、私の考えは変わり、日本の伝統的な図柄である鶴や鯉をモチーフにして型染めの図案を作りました。伝統的な技法を使う場合は、伝統的なデザインを用いたほうが合っていると思ったからです。

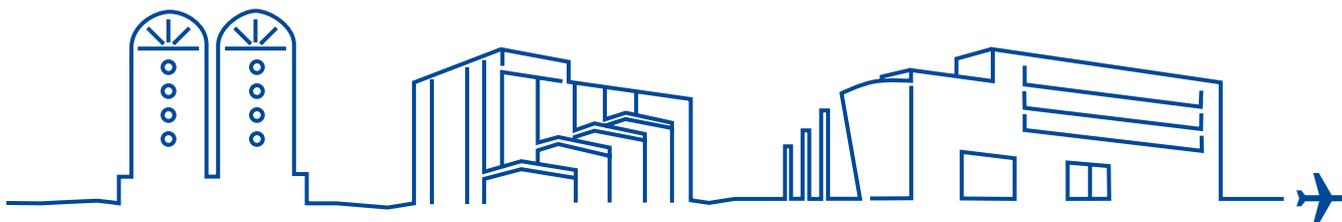
芸術工芸の制作活動を行う上で大切なことは、根気強く、こつこつと作業を続けるということを変えて感じました。芸術工芸学科染織専攻の学生作品展「NUNO展」で、留学中に仕上げた作品を出展し、制作発表することができました。

染織工芸の実習科目は、あまり会話ができなくても実技指導で学ぶことができます。しかし、もっと詳しく知りたい、細かい指導を受けたいと思うとき、言葉でなければ表現できないこともありました。ドイツでは、図案、色、素材について時間をかけて意見を交わしながら作品を仕上げていましたが、日本では、なかなかそうはいきませんでした。学生同士でも、お互い理解できる言語に限られ、意思疎通できないこともありました。言葉の問題は別として、ちょっと感じたことですが、学生の中には、とても内気で人と話すことが苦手な学生がいると思いました。私が友達をつくること、大学生活に溶け込むまでに時間がかかった理由のひとつかもしれません。

言葉の問題もあり、簡単に事が進まないこともありましたが、九州産業大学の学生として、日本で大変充実した留学生活を送ることができました。忘れられないことばかりです。日本語を上達させて、必ず福岡に戻ってくるつもりです。そのときは、みなさん、またよろしくお願いします。



「NUNO展」に並んだベレニスさんの自信作。中央の作品「ストール」は母への贈り物♪



Englishman in Japan

ジョエル ジャクソン

(イギリス：リバプール・ジョン・モーズ大学)



受入れ期間：平成19年9月～平成20年8月

受入れ学部：国際文化学部

イギリスと日本の違いに驚いたこと、気づいたことを紹介します。

イギリス中部の小さな町、スタッフォード州出身の私は、普段から大きな石造りでできた建物やどこも同じアパートタイプの建物を見慣れていました。ところが、日本では、長方形で石造りの建物、木造で変わった外観をした建物、帽子のつばのような屋根をした建物など、異なる外観の建物があちらこちらに建ち並んでいました。来日して受けた最初のカルチャーショックは、イギリスの建物の外観とは明らかに違うということでした。

次に、日本では、自分が人からどう見られているかということに気にする人が意外に多いと思いました。イギリスでは、自分の感情を素直に表現し、自由に意見を述べるほうが他人に受け入れられやすいと思います。しかし、日本では全くその逆のようであまり意見を述べない、迷惑にならないように周囲に気を遣いながら話したり、行動しなければならないと思いました。日本人からすると、それは当たり前のことだろうと思うかもしれませんが、日本では、周囲の視線を浴びないような行動、目立たないような行動をすることのほうが良いとされるような印象を受けました。

日本で生活する上で、私を悩ませたのが食事でした。少数派といわれるかもしれませんが、私は魚介類が大嫌いです。イギリスにいる時は、あまり気にしていませんでしたが、日本では魚介類を使った料理を頻繁に見かけます。私にとっては、究極の悩み・・・といったところでしょう。「イカ」という単語を聞いただけで、お腹がよじれてしまうほど、大嫌いです。好物の日本食といえば、ヘルシーではありませんが豚カツと牛丼です。

私の楽しみはというと・・・それは、カラオケです。勉強して疲れ果てた後のカラオケは最高です。一度マイクを持ったら、放さないほど友人と歌っていると、盛り上がります。

この半年で、いろいろな場所へ出かける機会がありました。例えば、九州圏内の空港視察のために宮崎空港へ行ったり、トヨタの工場見学、神社やお寺に行きました。また、大学近

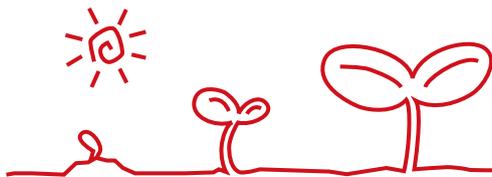
くの香椎小学校を訪問して、子供たちから日本の文化を紹介してもらい、一緒に給食も食べました。外へ出かけると、いろいろな人と出会うチャンスがあります。韓国、中国、ドイツ、ベルギー、フランスなど出身の異なる国の人ももちろん日本人との出会いがあり、交流が深まります。

私の留学生活は、2008年8月までです。しっかりと勉強に励みながら、残りの留学期間を思う存分楽しみたいと思っています。



初めての小学校訪問。
子供たちとの交流会で、折り紙や習字を体験したジョエルさん

平成19年度国際交流の歩み



昨年度も国際交流協定締結大学と定期交流が実施され、学生・教員の受入れ及び派遣により、友好の絆がますます深まっています。また、交流協定の枠にとられず、異文化交流体験を目的としたアメリカの学生研修訪問団の受入れも行っています。



受入れ

● カリフォルニア州立大学フラートン校、サイプレス大学(アメリカ)との文化交流

日程:平成19年6月1日(金)～7月2日(月)
受入れ:学生18人、教員1人
受入れ教員:高橋 真理枝 教授

● 忠南大学校経商大学(韓国)との定期交流

日程:平成19年6月28日(木)～7月2日(月)
受入れ:学生31人、教員3人
受入れ教員:KWON TECK SUNG 教授
NHO EUNG WON 教授
KO BYUNG WOOK 職員

● 東西大学校デジタルデザイン学部(韓国)との定期交流

日程:平成19年7月18日(水)～7月22日(日)
受入れ:学生33人、教員5人
受入れ教員:李 東勲 教授
金世和 教授
徐 漢錫 教授
金 亨優 教授
金度亨 助手

● 蔚山大学校デザイン大学(韓国)との定期交流

日程:平成19年7月18日(水)～7月27日(金)
受入れ:学生40人、教員2人
受入れ教員:金 聖福 教授
陳 恩雅 助教

● 上海工程技術大学芸術設計学部(中国)との定期交流

日程:平成19年7月29日(日)～8月3日(金)
受入れ:学生12人、教員3人
受入れ教員:許 傳宏 教授
魏 志傑 教授
王如儀 教授

● 天津大学(中国)との学術交流

日程:平成19年12月10日(月)～12月14日(金)
受入れ教員:宋 昆 教授
任 軍 講師

派遣

● 蔚山大学校デザイン大学、東西大学校デジタルデザイン学部(韓国)との学生・教員交流

日程:平成19年9月3日(月)～9月8日(土)
派遣:学生29人、芸術学部教員2人
派遣教員:古本 元治 教授
飯高 由希雄 教授

● 忠南大学校経商大学(韓国)との学生・教員交流

日程:平成19年11月2日(金)～11月5日(月)
派遣:学生18人、商学部第一部教員2人
派遣教員:細野 光一 教授
郭 智雄 講師

● 天津大学(中国)との学術交流

日程:平成20年3月25日(火)～3月29日(土)
派遣:工学部教員2人
派遣教員:小泉 隆 准教授
船越 正啓 助教



蔚山大学校と東西大学校の教員・学生受け入れ



九州産業大学から29名の韓国親善訪問団を派遣

今号の表紙

JUNCTION とは 2001 年に国際交流センター報として発行された折りに多文化が合流しあうようにと命名されました。その誌名にちなみ、今回の表紙には、古くからヨーロッパの交通の要所であるザルツブルグ旧市街の風景を採り上げました。

発行 / 九州産業大学国際交流センター

〒813-8503 福岡市東区松香台 2-3-1

TEL (092) 673-5588 FAX (092) 673-5611

掲載している職名及び学生の学年は平成19年度のものであります。

編集・デザイン / 芸術学部デザイン学科 成松 絵里